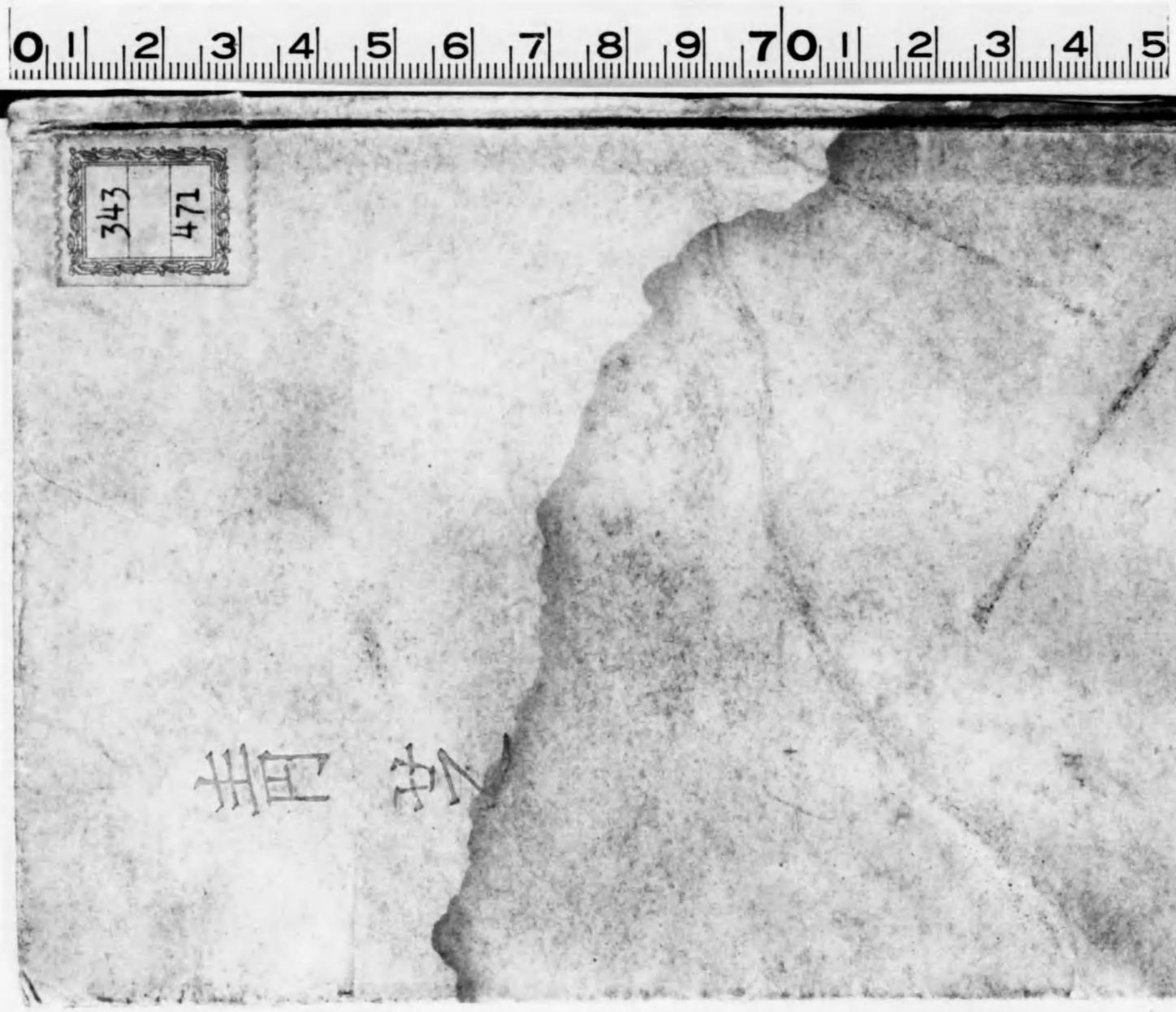
投



343
471

特 274
899

帝國圖書館藏
青芝之

草城句集

昭和七年一月
帝國圖書館

このさゝやかな著書を溫子とその母に贈る

とう〳〵生れたな　溫子よ　待つてゐた
政江も　ながい間　御苦勞だつた
ほんとに　ふたりとも　おめでたう

溫子よ　はやく　大きくおなり
ちよこちよこばしりが　できるやうになつたなら
青い芝の上で　鬼ごつこをしよう

草城

京鹿子叢書第九編

春

朝の茶のかんばしく春立ちにけり

啓蟄やはれば晴れとして東山

國原の春やとゝのひそめにけり

春寒の松ばかりなる園生かな

春寒やはなびらひるむ薔薇の花

別離

春寒やふたゝび逢へぬひとの顔

引眉のほそぼそとして春寒し

毛馬の春みにゆく船の混みにけり

春暁や雨を疑ふ妻の耳

春暁や電車おりたる人あるく

春の朝かへりみる妻覺めにけり

春晝や炊煙あぐる奈良ホテル

くしけづる音のかそけく春の晝

春日若宮

もろびとに覩られて巫女の日永かな

けうらなる春日の巫女の日永かな

永き日や巫女のかんばせしなさだめ

事務室の大きな窓の日永かな

厠出て葉蘭をぬらす遅日かな

潮さげて遅日の汀すゝみけり

海の船遅日の川を溯る

わが船の水尾をながむる遅日かな

疾き船に遅日の水の騒ぎ立つ

唐招提寺

暮遅く校倉は古りほうけぬる

曾根崎の裏のほそみち春の宵

草深の宿の一間の春の宵

キャバレエ 美人座

ひるがへるくちびる紅し春の宵

春の夜のくつたびをぬぐ女かな

春の夜の厚き褥によこたはる

蘆屋 大阪商船寄宿寮

春の夜や八十人のひとりもの

春の夜や影はぺらしてひとりもの

春の夜や大きちひさき牡丹刷毛

手をとめて春を惜めりタイピスト

カフエ ブラジレイロ

一碗の佳き珈琲や惜む春

悼

佐保姫に召さるゝ妹のわかれかな

うらゝかやいまだも枯るゝ三笠山

國原やほとほと霞む四方の山

なほ枯るゝ木立もありて霞みけり

宰相山 啼魚庵 即事

みるほどにあちこち灯る霞かな

朝酒の酔まはりけり花曇

大阪風景

春の月空にかゝりぬ控訴院

みちわたる潮のしづかな朧かな

道ばたに据風呂を焚く朧かな

黒谷の墓場の道の朧かな

妹と寢て初雷に覺めにけり

うつくしき衾の上の春の雷

宵月や霜ほどふりて春の雪

淡雪やかりそめにさす女傘

春雨や八坂の塔の下をゆく

一夜泊つ古き都の春の雨

堀川のあかつきさしぬ春の雨

なにはづのきたなき堀や春の雨

演舞場

妹と背の春雨傘を一ト紮げ

白良濱の砂に道あり春の雨

窓あけて春の夜の雨きこえけり

詩仙堂　三句

生垣のまつさをな葉に春の雨

春雨や添水みにゆく傘二つ

春の雨いにしへもかく降りにけむ

あはあはと西日さしたり残る雪

雪消道ゆふまぎれつゝはてもなし

ひとつ家の灯の漏れてゐる雪消かな

水温む沼に繆うて徑かな

宇治川

瀬がしらのひよいひよい白し春の水

宇治川

舟に乗りて毛氈に坐す春の水

ほがらなる日のかたぶきつ春の水

三月十九日は恰も妹が命日なればにほの海のほとり膳所の町はづれ丘がゝりなる奥津城に詣づ

妹の墓おがみにくれば湖の春

大岩の蔭のさむさよ春の山

茅渟の海春の大潮みちにけり

春潮や遊歩甲板浮らかに

曾根崎の豐たけにけり春の泥

南座を出て春泥の四條あり

まんなかにごろりとおはす寢釋迦かな

末法の甘茶をそゝぎたてまつる

花御堂もろびと散りて暮れ給ふ

釋奠や誰が註古りし手澤本

よその子のかしこさうなる智惠參

智惠詣嵯峨へまはりて疲れけり

子ら去りてむなしく雛の居り給ふ

あけたての白き障子や針供養

まぼろしの大きな船や實朝忌

神風のつめたかりけり伊勢參

卒業や浮世の濤の音きこゆ

撫肩のさびしかりけり二日灸

ふるさとの山も見飽きぬ爐を塞ぐ

逡巡として老の戀ふ昨日の爐

日のあたる壘の下にきのふの爐

屋根替のこまかき雨にきづきけり

津の海のしりぞきにけり汐干狩

孜々として地球に鍬を加へゐる

畑打に藪のかゞやく風日和

畠打子の墓に來て憩ひけり

花衣こゝに吾妹子風呂の中

晩炊の花見衣を脱ぎあへず

櫻狩徑閑かにて深山めく

山坂は埃も立てず櫻狩

蠶屋の窓おほまがときを灯り出づ

灯ともりて蠶屋のまたある木の間かな

物種のひとつびとつのいのちかな

種蒔やおもひにゑがく花美(はし)し

桑摘の灯のありそめて邑に入る

こんもりと男山あり蓬摘

猫の戀老松町も更けにけり

しげしげと子猫にながめられにける

猫去つて猫の子二つ殘りけり

置かれたるところを去らぬ子猫かな

うまれたる一びきの蠅とびめぐる

鶯や山川の瀬のしろじろと

鶯の啼かぬ日はなし山ごもり

鶯に叢杉闇をつくりたり

歸る鳥點々として雲表に

夕月のはやばや出づる雲雀かな

櫻鯛醜の魚等にかゞやける

鰈らは乞食魚かも櫻鯛

二三尾のあちこちすなる諸子かな

水垢のあたゝかさうな諸子かな

古水にうじやうじやとねる蛙の子

たなぞこにひちひち跳ぬる蛙の子

放たれてぶるぶるおよぐ蛙の子

浅潮に透きて蘆の芽の群かな

柳の芽篝燃ゆれば映えにけり

あけぼのゝ白き雨ふる木の芽かな

八ツ手の芽解けてちひさき八ツ手の葉

今宮

あをあをと細民窟の柳かな

人去りてまた來るなし水草生ふ

ゆふぐれのしづかな雨や水草生ふ

白梅の花はつはつに雨さむし

霾雨の吹かれてゐるや梅林

あちこちの障子灯りぬ梅林

虚吼翁 昭和日日新聞創刊

老梅のずはえしたりなめざましく

長岡天神

梅咲いて酒のにほひや神の庭

龍野

紅梅の咲いて初音とまをす宿

蒼古たる松のおもての花櫻

老櫻人のとよみに咲き倦める

悼

ねのくにの花にあそべる妹かとも

圓山

花簪つぼみの花に宵のほど

燃え出づるあちらこちらの花簪

常磐木の照らされてゐる花簪

ぱちぱちと火華の高き花簪

青苔にほつりほつりと落つる花

青苔の落花の數のふえにけり

木蓮のはつきり白し雨曇

大椿なりをしづめて花ざかり

春日野やタづけるみな花馬酔木

山の娘のすこやかにゆく躑躅かな

躑躅垣一つ二つは咲き殘る

連翹に月のほのめく籬かな

春蘭や耳にかよふは竹の雨

ヒヤシンス花満ちにけり座右の春

めをとむるヒヤシンスあり事務の閑

居残りの灯の閑かなりヒヤシンス

人におくる

忘れねばわすれなぐさも培はず

夏

夏めくと課長上衣をぬぎにけり

窓帷(かけ)の白くなりたる五月かな

夕月のたのしく照りて五月かな

清閑や薄暑の庭の石乾く

あぶらとり一枚もらふ薄暑かな

牡丹の畫に賛す

夫人起つて薄暑の窓をひらきけり

短夜の窓の明るき倶楽部かな

長屋

短夜の隣の欠伸きこえけり

晩涼やたばこの煙ふきなびく

湯あがりのどこやら濡れてすゞしさよ

鼻のあなすゞしく、睡る女かな

水晶の念珠つめたき大暑かな

あをあをと大暑の草木濡れにけり

わぎもこのはだのつめたき土用かな

夏深き寢くたれ髪を見られけり

白靴のよごれがちなり夏深く

冷奴くはぬ日はなし夏深く

薫風や花をはりたる牡丹園

双(もろ)袂なびきそろへり大(おほ)南(みなみ)風

さみだれの荷の蕚豆の眞青なる

さみだれの水旺んなる水車

さみだれの露おもしろき藥かな

眞青な栞屑かゞやく梅雨の畦

依羅

花滋きかぼちや畠の梅雨かな

大和川さみだれの水流れけり

さつきあめ降り倦みしかば灯りけり

古傘に受くる卯の花腐しかな

ともしびにみゆるうのはなくたしかな

寢白粉香にたちにけり虎が雨

うつくしきうまいの貌や虎が雨

夏の雨きらりきらりと降りはじむ

百姓の顔をならぶる甘雨かな

筆硯に及べる喜雨のしぶきかな

まつさをな日影の草や油照

雲の峰都市計畫にそびえたり

激つ瀬にむかへられけり夏の山

温泉の宿四方の青田の暮るゝのみ

朝の閑清水のひゞきこえつゝ

夕影のしぬびやかなる泉かな

夕明り水輪のみゆる泉かな

ゆくほどに水づきそめけり瀧の道

瀧浴びのひたに唱ふる聲來る

大人の襟寛濶の初袷

ほんのりと早灯の明るる葭戸かな

羅の折目たしかに着たりけり

はやばやと夏よそほひのタイピスト

戻るより夏足袋をぬぐ疲れかな

腋背を風のもとほるきびらかな

砂山に泳がぬ妹の日傘見ゆ

絹日傘傾いて日をかへしけり

あきんどの既につかへる扇子かな

ちらつける遠き暑(ひかげ)や青簾

わが豊寢青き簾の蔭に覺む

夕風の籐椅子二つあるばかり

籐椅子に冷たきものを欲しけり

ゆふづゝのひかり親しむ露臺かな

宵淺し露臺へのぼる靴の音

足もとに大阪眠る露豪かな

背がつりし一手は高し蚊帳はじめ

寝おくれの妻のかゝぐる蚊帳の裾

獨り寝の蚊帳の四隅を吊りめぐる

七夕やおしろい匂ふ古娘

勞咳の姉の臥床や星祭

かの窓に星を祭る灯いつかあり

梶の葉の墨のかをりのきこえける

梶の葉に書く歌おほき古娘

雨ふりて梶の葉のうた消えにけり

施餓鬼舟餓鬼の擡ぐる浪に乘り

古りにける一筋町の門火かな

かんばせの汗うつくしき祭かな

はやばやと更けゐる貰祭かな

蘭湯を出て客に會ふ主かな

夏籠や疊にこぼすひとりごと

描き倦む末流の徒や光琳忌

斷髪のゑりあし青し業平忌

似顔繪の團扇ばかりや冷奴

香水の霧かんばしくたちまよふ

夏氷掻くや白雪にはかなる

淡路

氷水蜑のうなゐと膝を並め

金色の鳳梨の透くジェリイかな

あきら忌の暑き神戸へ來りけり

あきら忌や季發まどろむ緣の端

ちらちらと葉の出そめたる釣葱

循吏

白服に煤をおそれて勤めけり

肌ぬぎやをとめは乳をそびえしむ

肌ぬぎやをとめの乳はさむげなる

雨城學位を授けらる

常夏の國の裸の博士かな

令嬢の鼻がしらより日焼かな

たわやめの水着の外の手足かな

みづうみの青さ目にしむ畳寢覺

足のうら二つそろへて畳寢かな

河内善光寺

ありがたき風に居るなり畳寢覺

妹の墓に佳き水そゝぎあかぬかも

妹の墓にわがそゝぐ水あまくあれや

避暑の宿夕風にみな灯りけり

汗冷えて國原の見のはろけしや

面上に汗のあまねき漢かな

汗の玉ふつふつ結びやまぬかも

若者の汗旺んなる力業

伸挽うなじの汗を見られつゝ

扇風機むなしき卓を吹き拂ふ

走馬燈簷端の闇とたゝかへり

戀すてふわが名は立ちぬ夏やつれ

夏痩をまをしあひけり家族風呂

噴水や芝青々とお茶の會

ふけわたる草木の風に端居かな

見おろして人のすゞめり蜂窩樓

妻の來ておしろい匂ふすゞみかな

をとめらの棟は早寢や避暑の宿

ぽつちりとホテルの白き登山かな

蚊遣火の煙の末をながめけり

みづうみに月のさしたる蚊遣かな

女房とうきよばなしの蚊やりぐさ

蚊火げむり哀しきひとをかくしける

山の木のうすゆふばえやほとゝぎす

ほとゝぎす夕影深くなりにけり

花消えしぼうたんの葉やほとゝぎす

夕潮のみちわたりけり蔦雀

山風にはらはらとべり糠螢

一つゐて中有にあそぶ螢かな

螢ゐて蘆の一ト穂の見ゆるかな

窓あけて小使寝たり螢籠

初蟬の清水阪をのぼりけり

初蟬のしきりになくや音羽山

黄檗

しづけさに初蟬のまたきこえけり

きよらかな砂に蜜ばさるるみちをしへ

みづすまし猫の屍とあそびをり

焼鮎の鹽しろじろと熱いかな

鮎の茶屋　即事

鮎啖ひてビールを飲んですゞしさよ

ひらひらと散りあらはるゝ残花かな

まなかひの白百合かをる小午餐かな

朝顔の藍のひさしき日蔭かな

ひそまりて咲きはなやげる牡丹かな

ぼうたんの花のすぼまる朧かな

風晴れて白雲徂くや牡丹園

ふりむきし遠くの顔や牡丹園

月さして遠き牡丹も見えわたる

湯あがりの裸けむらふ牡丹かな

芍藥や横顔うすき病上り

ウエートレス晝間はねむしアマリ、ス

ひともとの葵咲きつぎたのしけれ

外風呂や葵の花のタかげり

タイピストコップに薔薇をひらかしむ

みるからにつめたき水のひつじぐさ

古水にうきくさの葉のうすみどり

青萱の雨のはげしくなりにけり

遠き灯の一つ二つや月見草

砂をふむ音ばかりなり月見草

わかものゝ口笛娛し月見草

月見草月のけはひはありながら

停りゐる古きフォードや花ろばら

干草に馭者寢て鞭を鳴らしけり

干草のおとろへみえて香に立ちぬ

古坪のおもてに桐の落花かな

梅檀の花のさかりの睡き晝

凌霄花や眞白き函の地震計

めざましく日のあたりゐる新樹かな

ばさばさと柿の若葉に風出たり

ほそぼそと降りいでにけり若楓

醜の男のうまいのはてず木下闇

たはむれのさくらんぼうのつぶてかな

逢はぬ宵さくらんぼうも飽きにけり

秋

立秋のふんどし白き主かな

爽やかになればたのしきいのちかな

木隱りの沼のあをあをと秋の暮

旅人にをちこち灯る秋の暮

青杉に沈める寺の秋の暮

人逝くと知らせて來たる夜長かな

ホ句ずきの顏の揃うて夜長かな

句の座より旅途にのぼる夜長かな

さしわたる朝寒の陽のにごりなし

朝寒の風景に陽のうごきけり

朝寒のココアの湯氣に觸れにけり

肌寒やまことに白き菊の花

おとづれの名刺の白き夜寒かな

小倉山秋惜む人にあひにけり

誨淫の書にしたしめり暮の秋

爽籟や空にみなぎる月明り

春日

若宮はからくれなゐの秋日和

わけ入りて山うつくしき秋日和

草の戸はうらおもてなし秋日和

唐招提寺

校倉の影のつばらに秋日和

露冷えの灯の更けてゐる軒端かな

月落ちて露の匂へる木の間かな

行人の顔あきらかや露の秋

ぽうぽうとぽうぽうと鳴る霧笛かな

天の川冴ゆれば眠る都會かな

蕭々と天の川より風來る

銀漢やごとりごとりと牛車

わが思念月光となり太虚に滿つ

妹戀へば夜半のつきかげ空にみつ

月さして槇の白露あらはるゝ

月照れば遥かなひとをおもひけり

月照ればむかしの戀のなつかしや

わがゆばり月の光を蒐めけり

ひらかるゝ窓のひかりし良夜かな

刑務所の大きな塀の良夜かな

ませがきに遠き灯のさす無月かな

ぶらぶらと無月の道をあるきけり

たづさふる手のあたゝかき無月かな

籐椅子のつめたかりけり後の月

孤獨

わが淹れてわがすゝる茶や後の月

注ぐ茶のはげしき湯氣や後の月

後の月高く上れば顧みず

見とほしの道のむなしき十三夜

門前へ漢江來たる出水かな

石段のかくれんとする出水かな

獨り居て獨り愼む夜學かな

かへりみる褥の更けし夜學かな

秋扇やあふぎ古りにし故人の句

持ち古りて秋扇ともなかりけり

秋團扇四五本ありて用ふなし

なほ眠るひとりふたりや秋の蚊帳

女房のまをす寝言や九月蚊帳

秋蚊帳のひとの寝すがたみだれなし

早稲酒やひとつおぼえのサノサ節

すきはらの舌にするどき新酒かな

利酒の眞顏の眉の濃かりけり

淡海の邊波に洗ふ障子かな

淺からぬ水に洗へる障子かな

醍醐

古池に三寶院の障子かな

明治節稲田の日和歩きけり

蘆刈のくるぶし白く歩きけり

蘆刈のうろつく鎌の光りけり

去來忌や旦暮に存す嵐山

定家忌や巾幗秀歌なかんづく

鹿と居て鹿の蠅來る日和かな

穴惑水のほとりに居りにけり

穴惑妹のつぶてはそれにけり

跫音のひゞけばすべる穴惑

穴惑水をわたりて失せにけり

かりがねや一人按摩のひとりもの

留守なりし庵の色鳥日和かな

秩父丸鯊のうしほに聳えたり

蟷螂にひゞける鐘は東大寺

しづけさのきはまれば鳴く法師蟬

ひぐらしやあちこち灯る山がゝり

蜩をさびしがる娘と居りにけり

永觀堂

ひぐらしや僧にも逢はず寺の庭

蟲を聽く手のしづかなるおしまづき

きりぎりす鳴かねば青さまさりける

ふけて鳴く馬追を飼ふ隣かな

赤蜻蛉まなかひに來て浮び澄む

綿雲の眞白き櫻紅葉かな

くたぶれて紅葉を仰ぐゆふまぐれ

強き灯の照すところの紅葉かな

孝元陵

みさゝぎの楓のしるきもみぢかな

風吹けばさかんに落つる桐一葉

乾かして焚つけにする桐一葉

うちつけに芭蕉の雨のきこえけり

ありあけの露のはげしき芭蕉かな

一痕の月あり芭蕉つゆけしや

人寢ぬと芭蕉の灯影消えにけり

稽田の畦の景色の彼岸花

持つてゐてこはくなりけりしびとばな

食卓即事

次の皿なかなか來ねばの菊を見る

叢萩にかくれがほなる乙女ひとり

雅子のしゝ秋草の根をぬらしけり

秋草の風をみてゐる齒痛かな

深草元政庵

たゝずめばあちこち落つる木の實かな

きちこうのむらさき冴ゆるそばえかな

稲刈つて飛鳥の道のさびしさよ

架稲も橘寺も暮れにけり

栗飯のまつたき栗にめぐりあふ

岡寺の大きな柿を買ひにけり

茸の香のふんぷんとして道險し

青葡萄月光來れば透りけり

翁に野ざらしの句あり

うらがれをこゝろに露の照る身かも

冬

初冬の安樂椅子にうづもるゝ

ともし火の輝りはえてゐる寒さかな

ありそむるちりめん皺の寒さかな

うまずめは石の胎もつ寒さかな

なにがしの夫人病篤し

縷のごときいのちをまもる寒さかな

熊の檻飽食の肉凍てにけり

暮れてゐる冬至の顔の往來かな

食堂や師走の花のいきいきと

年の瀬や灯影しづかに琴の宿

年の瀬や選句疲れの茶のけむり

窓口に短日の客溜りけり

短日や盗化粧のタイピスト

短日の壁に居残勤務表

短日や天の一角あをあをと

短日の歩々に暮れゆき暮れにける

星屑に冬の夜の風つのりけり

てのひらに大寒の腹あたゝかし

大寒やしづかにけむる茶碗蒸

歩を返しそぴらに受くる冬日かな

日光浴は足よりはじむ

冬日射いのちの端にさはりをり

冬晴やさびしくなりし嵐山

冬晴やふたゝびはいる西大寺

かんばしき黒珈琲や初時雨

ひとつれの時雨やどりや清閑寺

ひとりゆく山科の道しぐれけり

ひとしぐれありたる道の日和かな

青笹と漆紅葉としぐれをり

残菊のなほはなやかにしぐれけり

時雨傘みな持つてねてひらき合ふ

界隈にたゞよひそめぬ時雨傘

二上は天の眉かもしぐれけり

東山はかなくなりてしぐれけり

一口村十三丁のしぐれ傘

一口村時雨舟よりあふぎつゝ

鳩ないていよいよ罩むる時雨霧

早舟のほそき舳さきにしぐれけり

巨椋

時雨傘ふたゝびひらく水の上

水をうつ時雨の音のあるばかり

時雨傘比枝が霽るゝと傾げあふ

寒の雨はじくからかさ通りけり

ゆくほどに霜のきびしき山路かな

二杯目の甘酒あつき霜夜かな

晴雪やたばこのけむり濃むらさき

てのひらに熱き火桶や雪景色

晴雪やとろとろ熱きチョコレート

逢ふ宵の大雪ふりとなりにけり

風花に大き巌のそびえたる

岡寺の高きに灯る冬の山

東山日のほがらかに眠りたり

かさなりて眠る山より高野の川

わが机眠るを硯屏に

光悦寺

北山の眠りの深くみゆるかな

天王寺公園

枯園や遠目の温室のあをあをと

あさらしの潜きたのしむ寒の水

忽焉と爐の開かれてありしかな

爐開いて美しき火を移しけり

うち湛へ氈のよろしも暖爐燃ゆ

暖房のよろしき氈を蹈みにけり

京城

城内にひゞける鐘はクリスマス

灯を吐いて降誕祭の厨口

うつしゑのうすきあばたや漱石忌

龍之介故人となりぬ漱石忌

漱石忌全集既に古びそむ

炭の香のはげしかりけり夕霧忌

あそび女の並みてあやかも夕霧忌

よしなごと炭をつぎつゝ思ひ出づ

炭をつぐあえかな指に目をとゞむ

つぎ去りし炭のかをりのきこえそむ

炭の香のたつばかりなりひとり居る

父 靜山老樵還暦

手焙にかざす双手の老いにけり

雙親に一つづゝなる桐火鉢

つれづれの手の美しき火桶かな

伊達卷の朱のさえざえと火を埋む

火を埋めて赤々と脱ぎほそりける

岡惚の話はずめり置炬燵

音羽山暮るゝ焚火のはなやかに

焚火屑珍の珊瑚に紛ふあり

背の銃のこだまがへしに妹の銃

寒稽古青き疊に擲たる

水洟の鼻のけだかき夫人かな

嫻雅なる鼻の水洟かまれけり

水洟をかむたくさんの小菊紙かな

水洟をかみ足りしかばこゝろよし

眞白な襟おしろいや玉子酒

酒弱のわかきつばめや玉子酒

住き部屋に情癡更けゝり玉子酒

遠吠のきこゆるばかり玉子酒

魚庄

湯豆腐や隣は更くる太融寺

湯豆腐に松竹梅を惜まざる

火の色の透りそめたるうるめかな

座に水野白川男爵あり

闇汁に箸を交ふる貴賤かな

寒玉子ましろの雛に孵るらん

通勤の羽織はでなる古娘

宮島

波晴れて七浦の神みなお留守

風邪の人ほつりほつりとまをするなる

庶務机邊

二三枚風邪の缺勤屆かな

わがまゝのかぎりをつくし風邪の妹

マスクして紅きくちびるかくれけり

手袋をぬぐ手ながむる逢瀬かな

道を問ふ人　探梅の志

かゞやける障子の穴や冬籠

冬ごもり障子ひらけば庭の景

次の間へ漏れてゐる灯や冬籠

今宵より灯りそめけり避寒宿

蒼海（うみ）の曉はやき避寒かな

柑橘の中に新建避寒宿

退營や師走はじまる堺筋

汲みたての水ちつくしき煤拂

道ばたに忘年會の反吐の華

柊を挿すあしもとの灯影かな

色里の朝寢の簷の寒雀

柴漬に笹鳴の來てをりにけり

笹鳴や水のゆふぐれおのづから

ペリカンの餌の寒鮒の泳ぐなり

しづかなる冬木の間歩きけり

葉ごもりに花ひらきをり冬椿

霜焦の花ばかりなり冬椿

醍醐三寶院

豊臣の大きな櫻枯れにけり

光悅寺

鷲ケ峯裾の楓は枯れにけり

草枯やごろりごろりとごろた石

打水のつらゝできたり花八ッ手

隱れ栖む柊の垣花さきぬ

櫨の實のしづかに枯れてをりにけり

玉菊の枯れをはんぬるすがたかな

苑の菊ことごと枯れぬ晴つゞき

徒然翁出て枯菊を顧る

枯菊やこまかき雨のゆふまぐれ

枯菊を焚く淡き火のうごきをり

いつまでも枯菊を焚くうすけむり

枯菊を焚くかんばせのほてりかな

歸り花あはれ咲きけりはつはつに

夕風のわたればさむし歸り花

歸り花まこゝに咲けり歩みよる

歸り花とほき木末に幽かなる

歸り花日かけりぬればさやかなる

池田室町

ゆきずりにみつけてうれし歸り花

雨はれてふたゝび寒し根深汁

散紅葉子がひろひしは美しき

新

年

大醉の客に元日終りけり

初春や島田おもたきタイピスト

京の端の北白川や寢正月

歳旦口占

春服や三十年のひとりもの

讀み倦めば妻の彈初きこえけり

跋

昭和二年より昭和五年に亘る四年間の作品を整理してこの小冊を編輯した。勿論、自選である。

曩に世に問うた「草城句集(花氷)」が、前後を數多くの序跋に護られ太だにぎやかであつたのに較べて、これはまたあまりにも簡素な出現だといへる。然し、いづれもその時々の僕の心境に適へるものであつて、このたびはこれで滿足してゐる僕である。

昭和七年二月

草城

京鹿子叢書

1 京鹿子第一句集	鈴鹿野風呂	一、五〇
2 野風呂句集	鈴鹿野風呂	二、〇〇
3 南風	水原秋櫻子	（品切）
4 草城句集	日野草城	一、五〇
5 よりゐ句文集	久保より江	一、五〇
6 京鹿子第二句集	日野草城	一、八〇
7 京鹿子第三句集	鈴鹿野風呂	一、五〇
8 播水句集	五十嵐播水	一、五〇
9 青芝	日野草城	一、五〇

京都市左京區吉田中大路八（鈴鹿方）

京鹿子發行所

振替口座大阪三三五七七番

昭和七年三月十日印刷
昭和七年三月十八日發行

版權所有

青芝

定價金壹圓五拾錢
送料六錢

著作兼發行者　日野克修　大阪市北區菅田町十九番地
發行所　京鹿子發行所　京都市左京區吉田中大路八
印刷者　高橋多吉　大阪市西區京町堀上通三丁目
印刷所　高橋南益社　大阪市西區京町堀上通三丁目

發售所　大阪市北區富田町十九番地　日野草城
振替口座大阪五九六二一番

終